2030 SDGsで変える

地域結ぶ 若いアイデア

持続可能な社会を目指し、学生らが地域の課題について考えるイベント「関西湾岸ＳＤＧｓチャレンジ」（主催＝甲南大学、朝日新聞社メディアビジネス局、協力＝神戸市、堺市、和歌山市、徳島市、岡山市）が昨年10～12月にあった。甲南大（神戸市東灘区）の学生と各地の高校生が５チームに分かれ、それぞれに自治体を担当。新型コロナウイルス感染防止のため、オンライン会議システムなどを活用しながら調査を進め、議論を深めた。その成果を12月20日、甲南大で発表した。

堺市

堺市の子ども食堂「ひみつ基地」を訪れ、課題などを聞くメンバーたち＝堺市中区、甲南大学提供

子ども食堂 愛称つけ一新

厚生労働省の調査では、子どもの7人に1人が、周りに比べて貧しい「相対的貧困」の状態にあるとされている。その受け皿にもなる「子ども食堂」の理想的なあり方を考えることが、堺市立高校の4人と大学生4人のテーマだった。

まずは、自分たちで「理想」を考えた。「大人も一緒に来られた方が良い」「地域のみんなが集まれると楽しそう」。メンバーからは様々な意見が出た。

運営者が集まるオンライン会議に出席したり、堺市内にある二つの食堂を訪ねたりして実態を調べた。分かったのは、すでに多くの食堂は、みんなが来られる場所になっているということだった。「理想」はすでに実現されていた。

ならば、もっと活用してもらう方法は何だろうか。注目したのは、調査の中で小学生から聞いた「食堂に行くのは恥ずかしい」という言葉だった。

「『子ども食堂＝貧困』というイメージが利用を妨げているのでは」。子どもが行きやすくなるためには、食堂のイメージを変えるような新たな呼び名が必要だと考えた。

発案したのは「地域スクール・ラボ（スクラボ）」という愛称だ。みんなが集う学校のような場になってほしいとの思いを込めた。ＳＮＳなどでこの名を広めて、イメージ刷新を狙う。

リーダーの甲南大マネジメント創造学部3年の永井千聖さんは「今あるものをどうアピールするのかを考えることも重要だと思う」と話した。

「関西湾岸SDGsチャレンジ」5チームが挑んだ課題

岡山市

地元サッカーチームと連携した企画を提案したメンバー＝神戸市東灘区の甲南大

Ｊ２を応援 つながり促す

引きこもりや貧困といった困難を抱える社会的弱者が、地域や人とのつながりを持つにはどうしたらいいのか。岡山学芸館高校の生徒と大学生8人のチームは、誰もが生きがいを持って社会参加できる街の実現をめざし、地元のサッカーチームと連携した啓発イベントを提案した。

新型コロナの影響で現地を訪問できず、岡山市と社会福祉協議会の担当者にＺｏｏｍで取材。「困難を抱える当事者からのＳＯＳがなければ、必要な情報や支援を届けることは難しい」という課題を共有した。

そこでメンバーは、地元で人気のサッカーＪ２・ファジアーノ岡山に着目。「みんなで試合を応援する『Ｓｔａｙ（ステイ） ｗｉｔｈ（ウィズ） Ｆａｇｉ（ファジ） ｄａｙ（デイ）』でつながりを深め、効果的に情報発信できないか」と、話し合った。

イベントでは、来場者のマスクに趣味や好みを示すシールを貼り、「似たもの同士」で話すきっかけをつくる。新しくできた仲間とコレオグラフィー（人文字）を楽しみ、一体感を味わってもらう。就労や生活の相談に応じる社協の「岡山市寄り添いサポートセンター」の窓口を案内し、来場者から必要な人に広めてもらう効果を狙った。

さらに、選手やサポーターらに協力してもらい、「1人じゃないよ」と伝える動画の制作も提案した。甲南大マネジメント創造学部1年の金銅あすみさんは「企画だけでなく、今後は実現に向けて動いていきたい」と話した。

神戸市

放置竹林の状況を観察するメンバー＝神戸市須磨区

竹林の活用探る「モデル」

「神戸市における地域循環共生圏の取り組みを考える」。大学生４人と甲南高校の４人の神戸市チームに課せられた難題だ。「地域循環共生圏」とは、地域で生み出された資源やエネルギーを循環させ、地域で消費・活用するという考え方だ。だが、漠然としている。メンバーは、久保はるか教授（環境政策学）の助言で、六甲山に注目した。

まず市森林整備事務所で、放置竹林が増えると生態系に悪影響が出る問題を学んだ。森林ボランティア「よこおみち森もりの会」の伊與田（いよた）安正代表の案内で同市須磨区内の里山を歩き、荒廃した竹林を観察。ボランティアの高齢化が進んでいることも知った。

メンバーは、悪者の竹を資源として活用できないか話し合った。学校を拠点に、学生や生徒が授業やサークル活動などを通して竹林整備に関わる。切り出した竹をパウダー状にして土壌改良剤として用い、栽培した野菜をブランド化して学食で消費するほか外部にも販売する。企業と連携して竹をバイオマス発電の燃料にするなど、学校が循環型社会の核となる「甲南学園モデル」を提案した。

放置竹林は全国的な問題のため、このモデルはあらゆる地域で実現可能な汎用（はんよう）性がある提案だ。甲南大経済学部２年の寺山恵一さんは「環境問題に対しては、次の社会を生きて行く若者世代が動かなければならない。モデルの実現に向けてボランティアサークルを作るなど具体的に取り組みたい」と話した。

和歌山市

和歌山電鉄貴志川線に乗車して取材するメンバー＝和歌山市

鉄道利用へ 駅に健康拠点

三毛猫の「たま駅長」で知られる和歌山電鉄貴志川線が、利用者減少により存続の危機にある。少子高齢化で人口が減るなか、どうやって地域に欠かせない交通手段を維持するか。市立和歌山高校の生徒4人と甲南大学生4人が考えた。

貴志川線は和歌山市と紀の川市貴志川町を結ぶ約14キロのローカル鉄道。たま駅長が話題を呼んだ約10年前は年間利用者数が２１０万人超だったが、昨年度は１９８万人に減った。

学生らは最初、観光客を集めて利用者を増やそうと考えた。ただ、それでは新型コロナウイルスの感染拡大など、非常時の打撃が大きくなる。さらに11月上旬、現地を訪れて運営事業者らに取材すると、「存続のためには地元の継続的な協力が不可欠だ」との声が多かった。そこで観光客ではなく、地元住民の利用を増やす方法を考えることにした。

最終的に学生たちが提案したのは、貴志川線の駅をコミュニティー拠点にすることだった。テーマは「健康」。薬局やリハビリ施設などを駅周辺につくり、地元で薬学や理学療法などを勉強中の学生に実習生として参加してもらう。駅の付加価値を高めて人が集まれば、自然と電車の利用も増えるという算段だ。高齢化を逆手にとった案だった。

リーダー役で甲南大マネジメント創造学部3年の鎌田基寛さんは「難しい課題だった。今後も身近なＳＤＧｓの問題として、ローカル鉄道に注目し続けたい」と話した。

徳島市

地元の観光振興団体の責任者に取材する徳島市立高校の生徒＝徳島市

マップ作り 水都を再発見

徳島市は吉野川とその支流が育んだ三角州、通称「ひょうたん島」を中心に発展した水都だ。その魅力を再発見し、守りながら、どう発信していくか。

甲南大学4人、徳島市立高校5人のチームが考えたのは、親しみやすい観光を通じてアピールすること。その出発点として、ひょうたん島や周辺を歩いて巡るためのマップを作った。

コロナ禍で現地での情報収集が制約を受けるなか、県東部を拠点とする観光振興団体にオンラインで取材。単に旅行客を増やすのではなく徳島の歴史や文化に関心がある人に訪れてもらい、市民が地元への愛着を深めることにつなげる視点が大切だと知った。

その上で、高校生は徳島市の観光関連団体にひょうたん島の由来や地理について聞き取り。大学生は吉野川やその支流で清掃活動などを続けるＮＰＯ法人「新町川を守る会」の中村英雄理事長にインタビューし、法人が船を運航する1周6キロのひょうたん島クルーズを体験した。地域の内と外の異なる視点から作業を進めた。

徳島市立高2年の久住（くすみ）風雅さんは「故郷の良さを再発見できた」。甲南大文学部2年の米田歩美花さんは「ＳＤＧｓは生きていく上で当然の課題だと知った」。他のメンバーも含めてあげたのが、吉野川可動堰（せき）の問題だ。徳島市民の住民投票で建設中止へと流れが変わったのは21年前。大半が生まれる前のことだったが、当時の反対運動が今につながる歴史を学んだ。

現場のリアル 気づこう

佐藤泰弘・甲南大副学長

イベントの狙いについて、甲南大学の佐藤泰弘副学長に聞いた。

「ＳＤＧｓ」には貧困や飢餓、環境問題など非常に大きなテーマが掲げられています。学生たちにとっては遠く感じるようなテーマもあるでしょう。でも、実際の社会問題は身近な所にある。学生たちには、現場へ行き、人の話を聞くことを通してそのことに気づいてほしいと思っています。

今の学生は生まれた時からインターネットに親しんでいる「デジタルネイティブ」の世代です。ネットで多くの情報に接し、様々な知識を蓄えています。

一方、知識や現実をどこかひとごとのように見ていたり、現実感を伴っていなかったりする。だからこそ、現場や人が持つリアルに気づくことがより重要になってきています。

今回のイベントは新型コロナウイルス感染防止のため、期間も短く、現場へ行くのにも制限がありました。ですが、学生たちの活動には、オンラインで会議を開いたり、現場へ行く人数を最小限にしたりするなどの工夫が見られました。制限がある中で、自分たちのベストを尽くす。社会に出てからも求められることを、体験できたのではないでしょうか。

学生の提案内容には、実際に実現できそうなものもありました。参加した自治体も、気づきや手がかりを得ることができたのではないでしょうか。今後は、学生の提案をどう実践していくのかについても考えていきたいと思います。

◇この特集は中村浩彦、山田健悟、筒井竜平、田中雄一郎、小若理恵が担当しました。